灰の中から蘇った男と女

髙山さなえ

《登場人物》・高崎三姉妹・
高崎　麻実子・長女
高崎　孝子・次女
高崎　金子・三女

・三姉妹の従兄弟・
高崎　寅蔵
石田　亀雄
高崎　純一

《場所》
高崎家の父方の祖父、祖母が住んでいた東京の家の座敷。
祖父、祖母は他界して誰も住んでいない。
床は板床、テーブルが真中にある。
少し高級そうなソファが上手に三人掛け、中央に一人掛け、下手に二人掛け。
舞台奥は奥座敷がある。
季節は夏。
この家にはクーラーはなく、扇風機もない。うちわはある。
部屋には、掃除道具が散らかっている
飲みかけの、ビール、つまみがテーブルにのっている

・一場・

麻実子上手のソファ、孝子下手のソファで寝ている
孝子、一回寝返りをうって、２回屁をする

孝子　ぷう・・ぶう（屁の音）
麻実子、起き上がり
麻実子　はい、はい。すみません。あの、いつもの
孝子　ぶう（屁の音）
麻実子　・・あれ？あれ？・・何だあ

麻実子、また寝だす
少しして、金子、上手からバケツと雑巾を持って登場
金子、掃除を始める

金子　まだ、寝てんのか
麻実子　・・起きてるよ
金子　何だ
麻実子　う～ん（伸びをする）
金子　・・・孝子は？
麻実子　こいつさあ、信じられないよ・・さっき、屁、
した
金子　するでしょ、そのくらい
麻実子　えっ、あんたする？
金子　するよ。そりゃあ
麻実子　音も、するの？
金子　あるよ・・月に三回くらいかな
麻実子　まじで？
金子　えっ、お姉ちゃんないの？
麻実子　私は・・・年に４回くらい
金子　もう、何の話？

麻実子　だから、したの、こいつが、屁
金子　それは聞いた。起きてよ
麻実子　うん。（起き上がる）
金子　それで？
麻実子　それで、私、その音で、起きた
金子　ああ、そう
麻実子　ああ、そうじゃないよ。こんな・・こんな、せっかくいい
　　気分で寝てたのに
金子　そうだね
麻実子　昼寝なんてしないもん、普段
金子　ホント、よく寝てたよね
麻実子　しかもさあ、孝子の屁がさあ、部長の声に聞こえて
金子　何それ
麻実子　高崎君、漢字、また間違ってるよ～って屁の音で
金子　そんな長かったの？
麻実子　分かんない。ぼんやりしてたし
金子　夢でも見てたんじゃないの？
麻実子　そっかなあ。確かに屁の音・・屁音だったと思う。（以下、
　　屁音で）高崎君、漢字、また、間違えてるよ
金子　長いねえ、しかも、わっかりにくい
麻実子　高崎君、漢字、また（ここまで屁音）あっ、きた・・きた
金子　何？・・本当だ
麻実子　くっさ～い
金子　やだもう
麻実子　もう、起きろ！孝子！

　　麻実子、孝子を起こそうとする

孝子　・・・何々？・・やだ、やめてよ・・ええ？くさい
麻実子　あんたのせいだからね
金子　うちわ、うちわ

　　金子、うちわを探す

孝子　どうゆうこと？
金子　あんたのせい
孝子　ええ？くっさ～・・何？ガス漏れ？
麻実子　そんな訳ないでしょ
孝子　ガスだよ、漏れてるって、早く逃げないと
麻実子　逃げるな～
孝子　やだあ

　　金子、うちわで孝子の顔を扇ぐ

金子　ほら、ね
孝子　ん？
金子　ガスじゃないでしょ。ガスじゃない
孝子　うん
金子　よく、かいでみな
孝子　・・・これは・・ガス、いや・・屁？
金子　ね
孝子　屁
金子　そう
孝子　何だあ、屁かあ。もう、びっくりさせないでよ
金子　これ、あんたの屁だからね
孝子　うそ

麻実子　本当。やめてよねえ
孝子　ごめん
麻実子　私は、あんたの屁で起こされたんだから
孝子　は？
麻実子　（以下、屁音で）高崎君、漢字、また
金子　お姉ちゃん、それ、やめてよ
麻実子　何で？ちょっと、上手くなってきたじゃん
金子　言葉に、匂いが漂ってる（以下、屁音で）高崎君
麻実子　下手
金子　だって、今習い始めたばっかだもん
麻実子　ああ、そうか。習う？
金子　お姉ちゃん、そんなに漢字間違えるの？
孝子　漢字？
金子　お姉ちゃんね、会社の部長に言われたんだって、また漢字間違えてるよって
孝子　ええ？・・だって何年だ？
麻実子　何が
孝子　勤め出して
麻実子　十・・十二年
孝子　あら～。ダメじゃん
麻実子　いいの。私は
金子　そんな事、言ったらもう、終わりだよ。一応、国文科出てるのにね
麻実子　そうなんだよね。不思議
孝子　お姉ちゃんにしか分からない不思議だね
麻実子　うん
金子　ねえ、やろうよ

金子、掃き掃除を始める

孝子　ああ、うん
金子　いきなり二人で打ちあがっちゃうんだもん
麻実子　だって、ねえ、昼からビールっていいよね
孝子　うん。上手かったあ
麻実子　金子だって飲んだじゃん
金子　私は、飲んだけど、寝てません。ちゃんと、奥座敷、台所、片付けました。料理も、作ったし
孝子　本当？やったあ。じゃあ、することないじゃん
金子　ここの、掃除
麻実子　そんな、汚れてないって
金子　散らかってるでしょ
麻実子　ああ
金子　お姉ちゃんと、孝子がいい顔して寝ててさあ、そしたら出来なくて
孝子　・・あのさあ
金子　ん？
孝子　その、孝子って、やっぱなんか
麻実子　別にいいでしょ
孝子　何か、やだ
金子　孝子
孝子　やだ。だって、私のほうが上だよ。お姉さんだよ
金子　知ってるよ
麻実子　いいじゃん。一個しか違わないんだし
孝子　そりゃそうだけどさあ
麻実子　そう、言われることをあんたがしたんだから、しょうがない

孝子　う～ん
金子　孝子、私、掃くから、雑巾がけして
孝子　え～
金子　じゃ、お姉ちゃん
麻実子　私は、もう、これ、拭いてるもん（ソファを拭いている）
金子　それ、雑巾だから、下の
麻実子　あっ
金子　二人で、床、雑巾、かけてください
孝子　・・は～い

麻実子、孝子、雑巾がけをやる気のない感じではじめる

麻実子　・・雑巾がけなんて、何年ぶりかなあ？こっち、掃いた？
金子　うん
孝子　えっ、この前、引っ越さなかったけ？
麻実子　ああ、そうか
孝子　大丈夫？
麻実子　そうだ、した、した・・三ヶ月ぶりかあ
孝子　そんな、感慨もないでしょ
麻実子　あるよ。三か月分の、感慨。噛み締めますよ～
孝子　何それ
金子　ねえ、お姉ちゃん、もう、そんなになるっけ、引っ越して
麻実子　うん
金子　どう？新居は
麻実子　あれ？あんた、来てないっけ？
金子　うん
孝子　本当に大丈夫？
麻実子　何が
孝子　物忘れ
麻実子　これは、持って生まれたものだから。才能ですから
孝子　あ、そうでした
金子　そっか、じゃあ、私のちょっと後に引っ越したのか
孝子　そうだよ、たしか
麻実子　あんたの家はどうなの？
金子　それがさあ、壁が薄いのね。隣との
麻実子　ああ。聞こえる？声
金子　聞こえるよ。いびきまで聞こえる
孝子　最悪だね
金子　うるさいのよ。それがまた
麻実子　そんなんで、寝れるの？
金子　まあ、辛かったのは、最初の二日だね。あとは平気になった
孝子　おお。さすが
金子　最近なんかあ、もう、隣の物音が全部聞こえるからさあ。ああ、同じテレビ番組見てるんだなあとか、あっ、今お湯が沸いたとか
麻実子　お湯？
金子　ピーって
麻実子　ああ
金子　ピーって
孝子　はい、はい
金子　でさあ、出かけるたびに行ってらっしゃいって言っ

て。帰ってくるとお帰りなさいっていって
麻実子　あんた、ちゃんと働いてんの？
金子　あとさあ、携帯で話してるの聞いてたらさ、くどい
てんのよ、女を
孝子　えっ、そんなのも聞こえるの？
金子　そりゃそうよ
麻実子　金子、どんなとこ住んでるの？
金子　でね、頑張ってるわけ。「俺だったら、そんな事しな
いなあ」とか「それ、絶対騙されてるって」とか「家
に来てゆっくり話しなよ。俺聞くよ。電話じゃさあ」
とか
孝子　結構、聞いてるなあ
金子　きっとね、私の予想だけど、その電話の女は、私の
家の隣の男に恋愛相談を持ちかけてたのね、あれは。
何かダメな男にひっかかって
孝子　まあ、そうだろうねえ
金子　だけどさ、「電話じゃさあ」とか言ってたけど、大概の事は
電話で済むじゃない。話せればいいことでしょ
孝子　まあ、うん
金子　なのに、来たのよ。その女が
麻実子　あ、そう
金子　いつ来たと思う？
孝子　ええ？
金子　いつ来たと思う？
麻実子　えっと
金子　当てて、当てて
孝子　ええ？教えてよ
金子　ダメ。ちゃんと考えて、当てて、当てて
麻実子　う～ん
金子　うううう・・その日よ！
麻実子　え～
孝子　若い！
麻実子　若い！
金子　若いの、そう、若いのよ
孝子　羨ましい。すばらしい
麻実子　ホント・・そんな時が・・あった・・私にも
金子　そう・・私にも
孝子　私でさえも
麻実子　・・で？
金子　ん？
麻実子　で、その後、どうなったわけ？
金子　それは、言わなくても分かるでしょ
孝子　まあねえ
金子　押し倒して、ビリビリ～で、キャー・・・よ
麻実子　激しいなあ
金子　何か、悲しくなっちゃってさあ、コンビニ行った。で、マヨ
ネーズ買った
孝子　えっ、ちゃんと聞かなかったの？
金子　そこからは私の趣味じゃないもん
麻実子　何よ。もうちょっと頑張んなさいよ
金子　だって、そうなったって事はさ、これから週に何回かはくる
わけでしょ
孝子　ああ
麻実子　やっぱ、来るんだ
金子　来るよ
孝子　その度に、コンビニ行くの？

金子　うんん。咳払いする。ううっんって。ううっんって。風邪引いてるんです、引いてるんですって
麻実子　喋るんだ
金子　うん。のど飴なめてるんですけどね、効かないんです。効かないんです。これ、これ、なめてるんですけどね
孝子　見えないから
金子　私は、大丈夫ですから、あなたが他の人のものになっても私耐えますから。耐える女ですから
麻実子　えっ
金子　うううう（泣く）
孝子　泣いてるけど
金子　一昨日なんて、何やってもダメだったから、私、歌、歌った
孝子　は？
金子　さよならの意味を込めて・・○○○
麻実子　やだ
孝子　絶対変人扱いされるって

金子、○○を歌い始める。

孝子　やめなよ
金子　だって、私は、本気だったんだよ。壁一枚隔てた恋・・ほとんど毎日一緒にいたんだから。毎日、毎日。朝一緒に起きて、一緒にご飯食べて、行ってらっしゃい。おかえりなさい。お風呂にする？それともご飯？ああ～！
麻実子　もう、なんなの？大丈夫？
金子　大丈夫
麻実子　あんた普通に男つくりなよ
金子　お姉ちゃんだって
麻実子　私はそんな事ないもん。あれだよ。二ヶ月前までいたよ、私
金子　うそ
麻実子　本当
孝子　知らなかった
麻実子　言ってないもん。言おうと思ってたら別れちゃったし
金子　どのくらい付き合ったの？
麻実子　・・一週間
孝子　はあ？
麻実子　だってえ
金子　それ付き合ったって言えるの？
麻実子　付き合ってたよ
金子　妄想だよ。お姉ちゃんの
麻実子　あんたに言われたくない
孝子　何で別れたの？
麻実子　何か・・嫌になっちゃった
金子　こらえ性がないのよ、お姉ちゃんは
麻実子　まあねえ
金子　あんたは？
孝子　ん？
金子　孝子はどうなの？
孝子　・・・私は、普通だよ
金子　続いてるんだ
孝子　うん。あのさ
金子　別にいいのよ。気にしないで
孝子　・・うん
金子　早く、やろ

孝子　うん
金子　とにかく、今日頑張んないと
麻実子　そうだね。本気だすよ。私
孝子　本当に？
麻実子　結構、本気。だってこれ逃したらさあ、ねえ
金子　そう、そう。絶対、おとす
麻実子　おとしまくる
孝子　でもなあ
麻実子　あんた、なによ。やる気あんの？
孝子　だって・・・姉妹で合コンなんて、する気になんない～
金子　だから、あんたは、数合わせだから
孝子　でもさあ
金子　言ってないでしょ。彼には。佐藤君、元気？
孝子　・・言ってない
金子　じゃあ、いいでしょ
孝子　でもさあ、親戚だよ。しかも、寅蔵おじちゃんとかじゃん
麻実子　まあねえ
孝子　テンション下がる
金子　でも、亀雄くん来るんだから
孝子　ああ、まあねえ。亀ちゃんは、私、好きだからなあ。でもなあ
麻実子　何なのよ。あんたは、私たちの邪魔さえしなければいいんだから。いるだけでいいんだから。バランス、バランス
孝子　何言ってるのかわかんない
麻実子　だから、いいの。ちょんと、そこに座ってれば。あっ、言っておきますけど、私、純一君狙いですから
金子　私、寅蔵
孝子　マジで？
金子　うん。何て言ったって、経済力よ
麻実子　じゃあ、丁度、いいわね
孝子　ええ？じゃあ、亀ちゃんは？
麻実子　あんた
孝子　そんな。ねえ、金子、あんた、本当に寅蔵おじちゃんなの？
金子　うん
孝子　亀ちゃんにしなよ
金子　いや
孝子　そんな、いくつ違うと思ってんのよ
金子　２０ちょっとか
孝子　もう、本気なの？バツイチだよ
金子　関係ない
孝子　子供だっているし
金子　いいの
孝子　農家だよ？りんごだよ？姑いるよ。あそこ、小姑もいてうるさいんだよ
金子　いいから！ちゃんと、働いて
孝子　うん・・・何だかなあ
麻実子　来ないね
金子　そうだね。もう、来てもいいのにね
麻実子　なあ、何作ったの？
金子　何が
麻実子　料理
金子　ちょっとしたものよ
麻実子　・・見てこよう

麻実子、上手へ退場
しばらく沈黙

金子　ちょっと、ちゃんとやってよ
孝子　・・うん・・ちょっと、いい？
金子　何？
孝子　・・あのさ
金子　佐藤君の事だったら・・いいから
孝子　あの・・・ごめん・・
金子　は？ちょっと、臭いんだけど
孝子　やっぱり
金子　やめてよ
孝子　気がついたか
金子　臭い～
孝子　止まんないの。さっきから、屁
金子　ちょっと
孝子　どうしよ。連続して屁が
金子　音しないね
孝子　うん。力入れてるから
金子　でも、くっさい
孝子　止まらない。ずっと出てる。出っ放し～
金子　やだあ。お姉ちゃん、お姉ちゃん
（麻実子　なあに？）
金子　ちょっと来て～
（麻実子　はあ？）

・2場・

寅蔵の声

（寅蔵　こんにちは）
金子　あっ
孝子　来た？
金子　来たね、誰か

麻実子、上手から下手へ走りぬける

麻実子　は～い
金子　お姉ちゃん！
（麻実子　いらっしゃい）
（寅蔵　久し振り）
金子　止まった？
孝子　うんん。一個、一個が長くなってきた
金子　やだ
孝子　どうしよう～
金子　力入れて。うんと力入れて
孝子　うん・・あっ
金子　どう？
孝子　止まった

寅蔵、麻実子、下手から登場
寅蔵は、旅行用のバックを持っている

金子　いらっしゃい
寅蔵　どうも
孝子　お久し振りです
寅蔵　うん。大きくなったなあ

金子　そんな
寅蔵　孝子ちゃんも
孝子　いえいえ。おじちゃんも元気そうで
寅蔵　いやあ、年取ったって俺は
金子　全然変わらないよ
寅蔵　そうか？
金子　うん
麻実子　亀雄君と一緒に来たんだって
孝子　えっ、亀ちゃんは？
寅蔵　電話がかかって来て。携帯に。今外で話してるわ
金子　そう。どうぞ、座って
寅蔵　うん

寅蔵、麻実子、ソファに座る

寅蔵　変わらないなあ
麻実子　ん？
寅蔵　この家
麻実子　あ、来た事あるんだっけ？
寅蔵　うん。何度か。東京に遊びに来た時に
麻実子　そう
寅蔵　でも、地図もらってよかったよ。亀雄はここ来るの
　初めてだったしさ
麻実子　うん・・あんた達、何やってんの？
金子　ああ、うん
麻実子　座ったら
孝子　うん

孝子、金子、ソファにそっと座る

麻実子　遠かったでしょ
寅蔵　まあな
麻実子　あずさ？
寅蔵　うん。何か、匂うな
麻実子　えっ
寅蔵　ガス・・でもないか
孝子　ああー！
麻実子　何？
孝子　あの、あの、お茶
金子　ああ
孝子　私、入れてくる

孝子、上手の方へ

麻実子　えっ
金子　何でもない。何でもないの。私も・・手伝ってくる
麻実子　うん
金子　孝子、行こう

孝子、金子、上手へ

寅蔵　何だ？あいつら
麻実子　さあ？
寅蔵　相変わらず、落ち着かないやつらだなあ
麻実子　まあねえ
寅蔵　・・元気か？

麻実子　うん。元気。おじちゃんは？
寅蔵　俺は、相変わらず。農業、農業、子育て、農業
麻実子　うん。いいじゃない
寅蔵　そうかやあ？
麻実子　うん。おばちゃんは？元気？
寅蔵　まあなあ
麻実子　おじちゃんの具合は？
寅蔵　うん。あと少しだなあ、あれは
麻実子　そう・・・大変だね
寅蔵　うん。かわいそうだから、家に連れてきたよ
麻実子　ああ、そう。自宅療養？
寅蔵　まあ、後、ちょっとだで
麻実子　忙しい時に呼んじゃったね
寅蔵　別に、そんなんでもないでさ
麻実子　うん
寅蔵　お前、仕事は？
麻実子　ん？ずっと一緒だよ
寅蔵　そうかあ。結婚は？
麻実子　そうなんだよね
寅蔵　何だよ。人事みたいに
麻実子　だって
寅蔵　東京だったら、いっぱいいるずら
麻実子　そうなんだけど
寅蔵　早く、しろよ
麻実子　うん
寅蔵　長女なんだし
麻実子　・・はい
寅蔵　他の二人もまだずら
麻実子　うん
寅蔵　三人ともいい年だに。実家で見合いでもしろ
麻実子　ええ～
寅蔵　いっぱいいるで、男は
麻実子　ああ
寅蔵　まあ、大体農業だけど。か、亀雄みたいな役場職員だけどな
麻実子　う～ん
寅蔵　帰って来い、な
麻実子　うん
寅蔵　東京なんていたって、大変なだけだだわ。長野はいいぞ。田舎だけど
麻実子　うん
寅蔵　こっちの人はいけねわ。いつも急いでるで。歩くスピードが違うで。地下鉄っていうだかやあ？あれはいけねわ。えらい騒ぎだわ
麻実子　あはは
寅蔵　笑い事じゃねえぞ
麻実子　はい
寅蔵　ここ来る途中に渋谷か？渋谷通ってきたんだけどさあ。人がそこらじゅうから沸いて出てたで
麻実子　そうだね
寅蔵　まっすぐ歩けなくてさあ
麻実子　うん。うん
寅蔵　えらい騒ぎでさあ、人が、こう、こう来てさあ。亀雄とはぐれそうだったから、俺、亀雄と手つないで歩いただよ
麻実子　はあ？
寅蔵　だでさあ、はぐれそうだったで。はぐれたら終わりだで

麻実子　携帯持ってるでしょ？
寅蔵　持ってるけどさあ、めったに使わねえで
麻実子　そう

金子、麦茶をお盆にのせて登場
すぐ後を孝子

金子　お待たせしました
寅蔵　おっ、ありがとう
金子　おじちゃん、疲れたでしょう
寅蔵　いや、大丈夫
金子　そう
孝子　亀ちゃん、まだ？
麻実子　みたいだねえ
寅蔵　・・今日、悪いな
金子　えっ
寅蔵　おまえらが、そんなに俺たちに気を使ってくれるなんて、思ってもなかったから
孝子　えっ
麻実子　あ、あのね
寅蔵　来てるのか？
麻実子　えっ
寅蔵　そ、その、お前の友達
麻実子　あっ、あのね、まだ
寅蔵　そうか。でも、そんな人もいるんだなあ、東京に。なあ。農家に嫁に来たいだなんて
金子　えっ
寅蔵　しかも、あれだろう。お前と同じ年なんだろう
麻実子　ああ、うん
寅蔵　そうか、そうか。あはははは。いひ～ひひひひひ
金子　お姉ちゃん？
麻実子　後で、話すから
寅蔵　ちょっと、便所かりていいか？
麻実子　うん。場所分かる？
寅蔵　うん。ついでに、二階、見てもいいか？
麻実子　いいよ
寅蔵　まさか、布団なんて敷いてないだろうなあ。ひ～ひひ
麻実子　やだあ、おじちゃん
寅蔵　そうだよなあ、そうだわ。ひ～ひひひひ

寅蔵、上手へ

金子　ねえ、お姉ちゃん
麻実子　ん？
孝子　どうゆう事？
麻実子　う、うん
金子　言ってないの？
麻実子　言ったよ
孝子　え～でも
金子　おじちゃんに何て言ったの？
麻実子　うんと・・私の、友達で、農家に嫁に来たい子がいるから、お見合いみたいなのするんだけど・・・集団お見合いみたいなあ
金子　嘘じゃん
麻実子　だってえ

孝子　だから、あのスーツ？
麻実子　うん。ちょっと驚いた
孝子　私、初めて見たよ。おじちゃんがスーツ着てるの
金子　私も
孝子　しかも、田舎者まるだしじゃん。はりきっちゃって
金子　かわいそう
麻実子　しょうがないでしょ
孝子　いつ言うの？
麻実子　うん。ちょっと、あの喜びようは予想以上だったからなあ
孝子　どうすんの？ああ！亀ちゃんには？
麻実子　同じ。私の、友達で、村役場に勤める人のところに嫁に来たい子がいてえ
孝子　まじで？
金子　もう〜どうすんのよう
孝子　もう〜
麻実子　臭い
孝子　ああ、ごめん
麻実子　ちょっと、やめてよ
孝子　ほっといて。もう、どうでもよくなってきた
麻実子　はあ？
金子　止まんないのよ。屁
麻実子　うそう
孝子　大丈夫。麦茶飲むと少しおさまる
金子　ああ、そう

（亀雄の声　こんにちは）

孝子　亀ちゃんかなあ
金子　どうしよう
麻実子　どうしよう
金子　もう、お姉ちゃんのせいだからね
麻実子　だって、あんなにおじちゃんがはりきるなんて、分かんなかったんだもん
孝子　亀ちゃんだって、きっと、同じだよう

（亀雄の声　あがるよう）

孝子　どうしよう、来た
麻実子　こうなったら、しょうがない。言おう
金子　お姉ちゃん、言ってよね
麻実子　うん、うん。でも、何て言おう
孝子　お姉ちゃん

亀雄、下手から登場

亀雄　こんにちは
孝子　いらっしゃい
金子　お久し振り
亀雄　久し振り
麻実子　げ、元気？
亀雄　おう。あれ？寅蔵おじちゃんは？
孝子　今、トイレに
亀雄　おお、そうか
孝子　どうぞ、座って
亀雄　うん

亀雄、ソファに座る
孝子、金子も座る

金子　疲れたでしょう
亀雄　いや
金子　そう
孝子　あずさで来たの？
亀雄　うん。おじちゃんと一緒に
麻実子　ああ！お茶、お茶

麻実子、上手へ

孝子　お姉ちゃん！
亀雄　何？
金子　何でもない

亀雄、匂いに気づく

孝子　どうしたの？
亀雄　いや・・何か、匂いが

金子、うちわであおぐ

金子　別に、何でもないよ
亀雄　そうか？
孝子　うん。何でもない、何でもない。元気？
亀雄　おう。お前は？
孝子　私は相変わらず、元気
亀雄　何年ぶりかなあ、なあ
金子　ああ、7年ぶりくらいかなあ
亀雄　そうか。金子、変わらないなあ
金子　そう？
亀雄　うん。お前は・・
孝子　きれいになったでしょ
亀雄　うん・・いや、やさぐれたなあ、お前
孝子　ええ？
亀雄　すっかり、東京の人だわ
孝子　そんなあ
亀雄　つぶらだったに、もっと、つぶらだったに
金子　えっ
亀雄　つぶらだったに
孝子　えっ、亀ちゃん、何が？
亀雄　目がさあ
孝子　目？
亀雄　うん。つぶらな目してたに
孝子　そんな、今でもつぶらだよ
亀雄　いやあ
孝子　ほら、ほら
亀雄　違うわあ。前は、もっと、金子に似てたに
孝子　そんな、逆でしょ。私は金子のお姉さんなんだから
亀雄　ああ、そうか

麻実子、麦茶を持って登場

亀雄　あれだな、麻実子に似てきたな、お前

孝子　そう？
亀雄　うん。似てきた
麻実子　何？言った？
金子　まだ
亀雄　ん？
麻実子　何でもない
孝子　ねえ、亀ちゃん
亀雄　何だ？
孝子　光恵とは、さあ
亀雄　おう、もう、とっくに別れたよ
孝子　そう
亀雄　二年くらい前かなあ
孝子　そうなんだ。知らなかった
亀雄　光恵から、何にも連絡言ってないのか？
孝子　うん。帰っても会わないし
亀雄　そうか。確か、お前から紹介してもらったんだよな
孝子　うん
亀雄　ごめんなあ
孝子　そんな事ないよ

寅蔵、上手から登場

寅蔵　おい、おい、純一来たぞ
金子　えっ
寅蔵　二階の窓から見えたぞ
麻実子　わーい

麻実子、下手へ

寅蔵　おい、二階に、布団が敷いてあったぞ
亀雄　ええ？（喜ぶ）
寅蔵　ひひひひひ
金子　おじちゃん、あれはね
寅蔵　三組、敷いてあった。ひひひい
孝子　おじちゃん、おじちゃん
寅蔵　無理だよなあ、無理だよなあ。隣でなんてなあ。出来ないよなあ。ひひひひひ
金子　おじちゃん、落ち着いて。お茶、飲んで
寅蔵　お、おう。ひひひいひひ

寅蔵、お茶を飲む

寅蔵　ふう・・ひひひいひひ
孝子　ダメだ
亀雄　おじちゃん、あんまり興奮すると
寅蔵　おお、そうだ。ひひひひ
亀雄　薬、薬
寅蔵　飲んどくか・・ひひひひひ

寅蔵、薬をポケットから出して飲む

金子　おじちゃん、どっか悪いの？
寅蔵　ひひひひひ
亀雄　心臓がな、ちょっと
孝子　そう

純一、麻実子、下手から登場

純一　こんにちは
金子　こんにちは
孝子　どうぞ
純一　どうも
孝子　ここ、どうぞ
純一　ああ、はい

純一、亀雄の隣に座ろうとする

麻実子　今、お茶を
純一　はあ、すみません
孝子　そこ、座って
純一　はあ

純一、座る
麻実子、上手へ

亀雄　久し振りだね
純一　ええ、元気ですか？
亀雄　おお
純一　おじさんも、元気そうで
寅蔵　おう、元気、元気。まだ、来ないのか？
金子　あっ、あのね、何か、遅れてるみたい
寅蔵　そうか。遅いなあ
孝子　ごめんね、何か
金子　あ！あの、私も、お茶

金子、上手へ

孝子　ええ？
寅蔵　楽しみだなあ
孝子　う、うん
亀雄　純一も、今日の合コン？
純一　ええ、まあ
寅蔵　お前は、別にいいだろう。東京にいるんだから
純一　そんな事ないですよ。合コン、合コンの日々ですよ
寅蔵　そんなにか。いいなあ
純一　いえいえ
亀雄　でも、悪いなあ
孝子　えっ
亀雄　お前達に、こんな事してもらって
孝子　そんな、気にしないで
亀雄　確かにさあ、出会いがないからなあ、田舎だと
孝子　はあ
純一　合コンはあるんですか？
亀雄　ないよ。近所の寄り合いばっかだよ。しかも、ばあさん、じいさんばっかの
純一　ああ

男達、匂いに気づく

寅蔵　あれだな、やっぱり
亀雄　匂いますね
寅蔵　うん

純一　ガスですか？
亀雄　いや
孝子　どうしたの？
亀雄　うん。ちょっとな。純一、したか？
純一　えっ？いえいえ
亀雄　おじちゃん？
寅蔵　してね。俺はしたら、したって言うで
亀雄　俺も、してねで・・・と、いう事は

孝子、麦茶を飲む

亀雄　何？お前か？お前、屁こいたのか
孝子　違う、違うの
亀雄　だって、お前しかいないで
孝子　違う！・・ちょっと、私も、お茶

孝子、上手へ

寅蔵　くせえなあ
亀雄　臭い、臭い
純一　あっ、、うちわで

純一、うちわをもってあおぐ

寅蔵　どんな子が来るのかやあ、今日
亀雄　ええ
寅蔵　どんな子かやあ
純一　麻実子ちゃんの友達なんですよね
寅蔵　おお、そうらしいわ
亀雄　それがなあ、どうずら
寅蔵　何が
亀雄　どうずら。実際、どうずら、実際、どうずら、実際
純一　だから、何がですか
亀雄　いやあ、さあ。麻実子だでさ
純一　ああ
亀雄　金子の友達なら、期待できるに
寅蔵　そんな事ないわ
亀雄　でもさあ
寅蔵　若いってのは、一番だで。一番の事だで。おまえは、あれずら。金子の事好きだったで。昔から
純一　そうなんですか？
寅蔵　おう
亀雄　子供のときの話だわ
寅蔵　ずっと金子のあと追っかけてたからさあ
純一　ああ、何度か見ましたね
寅蔵　そうずら
純一　でも、金子ちゃんは、逃げてましたけど
亀雄　そうだだよ。あいつは、おれの気持ち分かっていながら、逃げるてただよ。でもさあ、追っかけてきて、追っかけてきてって金子の目がさあ
寅蔵　目が何だ
亀雄　あの、つぶらな目がさあ、言ってるだよ。私は、逃げたふりをしてますけど、でも、亀ちゃん、追いかけてきて。私を追いかけてきてって
純一　まさか

寅蔵　お前、飲んでるのか
亀雄　金子はさあ、振り向くだよ。いっつも。振り返って、俺を見てたんだよ
純一　飲んでますね
寅蔵　いつ飲んだずら。ずっと一緒だったに。あれだわ、何か用があっただわ
亀雄　ん？
寅蔵　振り返ったのはさ、お前に用があって・・例えば、金くれ、とかさあ
亀雄　まさか
寅蔵　いや。あいつは、子供のときから、何かにつけて俺に金くれ、金くれって
純一　ああ、僕も
亀雄　ええ？
純一　僕、お年玉取られましたもん。何か、説得されて
亀雄　金子にかぎって、そんなこと
寅蔵　いや、いや。金子は、あいつは名前どおりだで。４歳のときに、おじちゃんの家、何坪？って聞いたで。しかも、坪単価で計算してたで
純一　ああ、やりそう
亀雄　ねえ。そんな事は、ねえ
寅蔵　お前は、騙されてるだわ
亀雄　金子は俺にとって、俺にとって、俺にとって
寅蔵　何だ？
亀雄　俺にとって、俺にとって
寅蔵　だから、何だ
亀雄　いや、これ以上は
純一　言ってくださいよ
亀雄　言えね。今日は、これから、合コンだで
純一　ああ
亀雄　昔の恋は捨てなきゃいけねで
寅蔵　まあ、そうだわな。遅いな
純一　ええ
寅蔵　純一
純一　えっ
寅蔵　狭い
純一　ええ・・えっ？
寅蔵　お前、あっち座れ
純一　ああ、はい、はい

純一、席を移動する

寅蔵　俺さ、実は合コン初めてでさあ
純一　そうですか
寅蔵　何したらいいか、本当はわからねえだよ
亀雄　ああ
寅蔵　何話したらいいずら
亀雄　本当だわ。俺もしたことねえで
寅蔵　なあ
純一　あれですよ。何でもいいんですよ。とにかく、ほめ倒す。その服、かわいいね、とか、靴かわいいねとか
亀雄　それでいいだかや
寅蔵　お前は、そんなに合コンしてるだか
純一　ええ。僕のライフワークですから
寅蔵　そうか
亀雄　それで、彼女は出来ただか

純一　それが、いつもダメなんですよ。理由は僕にも分からないんですけど
亀雄　理由、わからねえだか
純一　ええ
寅蔵　いつもどんな風にやってるだ？
純一　いつもは・・じゃ、亀雄さん女の子で
亀雄　お、おう
純一　おじさん、ちゃんと見ててくださいね
寅蔵　うん
純一　君、何の仕事してるの？
亀雄　ん？・・ＯＬ
純一　へえ・・・・
寅蔵　おい
純一　えっ
寅蔵　もう、喋らないだか
純一　違いますよ。間ですよ、間
寅蔵　長くねえか
純一　いや、このくらい取らないと
寅蔵　そうか
純一　前半は、あの、間の前半は、じっと目を見るんですね。で、後半は、目をそらすんです
亀雄　何で？
純一　この人何考えてるんだろうなあって思わせるんですよ。ミステリアスな男を演じるんです
寅蔵　ミステリアス。それ必要だだか
純一　興味をそそるんですよ
寅蔵　そんなもんかやあ
純一　もう一回、やりますよ。最初から
亀雄　おう
純一　君、何の仕事してるの？
亀雄　・・・看護婦
純一　へえ・・・・
寅蔵　おい、さっきより長くねえか
亀雄　ええ

純一、目をそらす

寅蔵　今から後半か
亀雄　そうみたいだわ
寅蔵　・・・寝てりゃしねえか
亀雄　いや。まあ、待ちましょ
寅蔵　・・・喋りかけたらどうだ
亀雄　ええ？
寅蔵　これじゃ、らちがあかねわ
亀雄　じゃあ・・・あなたは、何の仕事してるんですか？
純一　僕？僕、銀行員
寅蔵　嘘じゃねえか。お前、フリーターだろ
純一　もう、話しかけないで下さいよ
寅蔵　だって
純一　いいんですよ。少しくらい嘘ついたって
寅蔵　少しじゃねえだろ。大事な問題だぞ。しかも、お前、銀行員に全然見えないし
純一　見えますよう
寅蔵　見えね
亀雄　まあ、まあ
純一　もう一回やりますよ。君、何の仕事してるの？

亀雄　そっからか・・・スチュワーデス
純一　へえ・・
寅蔵　早くねえか、後半にいくのさっきより早くねえか
亀雄　シー
寅蔵　スチュワーデスには興味がねえって事か
純一　・・飛行機、乗ってんだ
亀雄　うん・・・
寅蔵　盛り上がらないぞ、会話が
亀雄　ええ
寅蔵　いいだか。これでいいだか
純一　・・・・いいなあ・・飛行機
寅蔵　ただの感想じゃねえか
純一　あっ
亀雄　・・・何か、発見したみたいですね

純一、亀雄の横にすわる

純一　ゴミがついてる。フケだあ
亀雄　あっ、ありがとう
寅蔵　ひどくねえか

純一、亀雄の太ももを触る

純一　君、いい太ももしてるね
亀雄　う、うん
純一　いいなあ、太くて
寅蔵　失礼だぞ
純一　おじさん！静かにしてくださいよ
寅蔵　でもさ
純一　せっかく上手くいってたのに
亀雄　えっ、今のが？
純一　もう、もう一本
寅蔵　まだやるのかよ

照明、暗くなる

純一　君、何の仕事してるの？
亀雄　んんん・・・トラック野郎
寅蔵　お前、それ男だろ
亀雄　浮かばね、もう、浮かばね
純一　へえ　・・・

暗転

・3場・

明転
舞台には、全員いる
テーブルには、つまみとビール

麻実子　皆さん、よろしいですか？
孝子　はーい
麻実子　いいですか？いいですか？
金子　はい
麻実子　おじちゃん、大丈夫？
寅蔵　お、おう

麻実子　それでは、皆さん、乾杯！
孝子　乾杯
金子　乾杯

全員、ビールを飲む

孝子　あ〜、うまい
麻実子　うまいね
孝子　元気だして
亀雄　おう
麻実子　飲んで、飲んで
純一　はあ
金子　どうぞ
寅蔵　うん。本当に来ないだか？
麻実子　ごめんね
寅蔵　そうか
亀雄　どうしたもんずら
純一　ええ
麻実子　まあ、いいじゃない、飲もう
孝子　そうそう
寅蔵　でもなあ、お前達と飲んでもなあ
亀雄　うん
麻実子　そんな事言わないで
孝子　そうだよ。せっかくなんだし
金子　こうやってね、お酒飲むことも今までなかったんだから
麻実子　うん
寅蔵　まあなあ・・はあ
亀雄　はあ
孝子　亀ちゃん！
亀雄　ああ
麻実子　まあ、私たちでは役不足でしょうが
寅蔵　はあ
麻実子　しょうがないでしょ。みんな、都合悪くなっちゃったんだから
金子　おじちゃん、飲もう
寅蔵　飲むか
金子　うん
寅蔵　つまみ、こんなのしかないのか
金子　ごめんね
孝子　そうだよ。あんた、料理作ったって言ってたけどさあ
金子　料理でしょ。盛り付け
麻実子　こうゆうのはね、料理とは言わないの
金子　だって私頑張ったよ
亀雄　十分だよ
金子　本当？
亀雄　うん。うん
金子　おいしい？
亀雄　うん
金子　よかった。作ったかいがあった
亀雄　うん。なあ、金子は今、いるだかや？
金子　何？お金？
亀雄　いや、その
金子　お金はいつもいるよ。私は
亀雄　違う。あの、男はいるだかや？

金子　ああ、いないよ
亀雄　そうか
孝子　亀ちゃん
亀雄　そうかあ、そだだな。そうかあ
金子　純一くんは？
純一　いないですよお。じゃなきゃ、来ないですよ
麻実子　あは・・そう
寅蔵　お前達、実家には帰ってるだか？
金子　あっ、あんまり
孝子　私も、電話くらいかな
寅蔵　寂しがってたぞ。正月も帰ってこないって
麻実子　最近行ってないね
金子　うん
寅蔵　一人くらい、帰ってくりゃいいに
孝子　亀ちゃん、どうぞ
亀雄　お、おう
金子　私、来月、一回帰ろうと思ってるんだけど
麻実子　あ、そう
金子　純一君は？
純一　僕もあんまり帰ってないですねえ
金子　そうじゃなくて
純一　えっ
金子　純一君は、どんな子がタイプなの？
純一　はあ
麻実子　年上は大丈夫なの？
純一　ええ、僕はなんでも
麻実子　なんでも？
純一　まあ・・あの

金子　一応ね、合コンもどき
純一　はあ
金子　せっかくだから
亀雄　そうだな、そうだな。席替えするか？
金子　まだ、早いよう
亀雄　そうか
純一　じゃあ、あの・・僕のタイプは
金子　言うんだ
純一　えっ
孝子　どうぞ、どうぞ
純一　あの、そうですね。目がおっきい子が
金子　あっ
亀雄　そうだよな。俺もそう
純一　そうっすよね。大きいと、引き込まれますよね。あと、胸は
麻実子　引き込めればいいのね
孝子　お姉ちゃん
麻実子　大丈夫、私、冷静
寅蔵　胸がなんだ
純一　大きければ、大きいだけ
金子　あっ
亀雄　馬鹿だなあ。お前
純一　でも
麻実子　うそでも、大きく見えればいいのよね

麻実子、つまみを自分の胸に入れる

孝子　お姉ちゃん

麻実子　気にしないで
純一　あの
麻実子　気にしないで
純一　あと、あと
金子　もう、いいから
純一　へ？
麻実子　はあ
孝子　飲も。お姉ちゃん
麻実子　おう
金子　おじちゃん？
寅蔵　ん？
金子　辰雄くん、元気？
寅蔵　元気だわ
金子　そう。いくつになったの？
寅蔵　１３歳
孝子　もう、そんなに？
寅蔵　中１
金子　そっかあ。おっきくなったね。連れてくればよかったのに
寅蔵　そうゆうわけにはいかないわ。合コンだったで。その予定だったで
亀雄　金子
金子　気にしなくていいのに
寅蔵　そうかや？
亀雄　金子
孝子　亀ちゃん
金子　だって、辰雄くんのお母さんになるってことでしょう？
　　じゃ、連れてこないと
寅蔵　うん
金子　呼んだ？
亀雄　うんん
金子　そう・・私、酔っ払っちゃったかも
寅蔵　大丈夫か？
金子　うん。ちょっと、ふらふらする
亀雄　金子
金子　あっ、平気だから
亀雄　お、おう
金子　ちょっと、いい？
寅蔵　うん
純一　お茶、飲みますか？

　　純一、ペットボトルを見せる

金子　大丈夫
亀雄　席替え、席替えするか
孝子　うん
麻実子　そうだね
金子　だめ、私、動けない
麻実子　ちょっと、金子！あんた、展開早いのよ
金子　うっさい。おじちゃん
孝子　もう、席替え。ほら、ほら。おじちゃん
寅蔵　いや、でも
麻実子　いいの、こいつ一人でワイン三本あけるんだから
寅蔵　えっ
金子　ちょっと
孝子　おじちゃん、こっち

金子　動けない～
孝子　いいから
寅蔵　お、おう

全員、移動する

麻実子　純一くんは、このままで
純一　ああ、はい
金子　もう、何なの？
孝子　亀ちゃん
亀雄　くっつくな、くっつくな
孝子　いいじゃん、少しくらい
亀雄　金子、飲むか
金子　うん
純一　あの、僕、トイレに
麻実子　あ、どうぞ
純一　どこですか？
麻実子　ああ、案内します
純一　はい

純一、麻実子、上手へ

純一　ここ、親戚の家って本当ですか？
麻実子　そう。母親の実家。もう、誰も住んでないけど
純一　へえ
亀雄　金子、こっちくるか
金子　うんん

沈黙

金子　はあ・・ちょっと、離れなさいよ、そこ
亀雄　おう

亀雄、席を移動する

金子　飲む？
亀雄　うん
金子　今日、どっか泊まるの？
亀雄　ここの近くにホテルとったから
金子　あ、そう。おじちゃんも？
寅蔵　うん
金子　どこ？
亀雄　駅前の何とかっていう、白いビルの
金子　ああ
亀雄　一応、ツインだで
金子　おじちゃんと
寅蔵　いや、それぞれ、ツイン
孝子　えっ、何で？
金子　そうなんだ。何だ、準備万端だね
亀雄　おう
金子　でも、残念だったね。合コン出来なくて
寅蔵　そうなんだよな。フー
亀雄　いやあ、おじちゃんは
金子　何？
亀雄　おじちゃんは、おじちゃんは
孝子　何なの？

亀雄　おじちゃんは、おじちゃんは、寅蔵おじちゃんは
孝子　亀ちゃんさあ
亀雄　ん？
孝子　その、何度も繰り返す癖変わらないねえ
亀雄　そんな事ねえわ。これでも年とともに減ってきたで
　さあ
孝子　そうかなあ
亀雄　しかも、俺が繰り返すのには意味があるで。大事な事を繰り
　返すで。聞いて欲しいって所を繰り返すで。ここぞって時に
　繰り返すで。話のポイントを繰り返すで
孝子　分かった、分かった。もう、いいから
亀雄　本当だで。子供の時より減ったで
金子　それ聞いた
亀雄　昔はさあ、自分でも何言ってるか途中で分からなくなってた
　で
孝子　そうだったよね
亀雄　それに比べたら、比べてみたら、比べようとしたら、比べた
　としたら、今はいい方だで
孝子　・・・はい
寅蔵　でもさ、今日電車でもそうだったんだけどさ、こいつはずっ
　と同じ事繰り返してしゃべるずら。するとさあ、どうゆうわ
　けか自然と眠くなるで。あれはたいしたもんだわ。
孝子　ああ、分かる。私ちょっと今眠いもん
金子　私も
亀雄　昔はさあ、話の最初と最後が全く違う事になってたで。最後
　と最初がさあ違ったで全く、違ったで最初が全く、それに比
　べて今はさあ
金子　今も違うよね
亀雄　えっ
金子　おじちゃんの事、言おうとしてなかったけ
亀雄　おう・・そうだっけか
孝子　うん。確かそう
亀雄　ああ、ああ、そうだわ
孝子　思い出した？
亀雄　おう
寅蔵　何だ
亀雄　おじちゃんはさあ、実はいるらしいだよ
金子　えっ
亀雄　彼女
孝子　あ、そう
寅蔵　いや
亀雄　あくまでも噂だけどさ
寅蔵　いねえで
金子　そうなの？
亀雄　おお、しかも、またフィリピン人らしいわ
孝子　また？
寅蔵　・・・
金子　本当？
寅蔵　・・別に付き合ってるわけじゃないで
亀雄　ええ？
金子　じゃあ、何なの？
寅蔵　辰雄に、向こうの言葉教えてもらってるだよ。母親
　に会いたがってるで
金子　連絡来るの？マリアンさんから
寅蔵　こねえ。どこにいるかも知らねえ
金子　じゃあ

寅蔵　でも、あいつは、多分、探しに行くと思うだよ
孝子　えっ
寅蔵　捨てられたとは思ってねえで
金子　ああ

上手から、純一、麻実子の声

純一　もう、やめてくださいよ
麻実子　遠慮しないで
純一　いいです、いいです
麻実子　そんなあ

純一、麻実子、登場

麻実子　お酒持って来たよ
孝子　おっ
金子　そんなのあったんだ
麻実子　うん。棚の奥のほうに
孝子　飲もう、飲もう
金子　私も
麻実子　みんな飲む？
寅蔵　いや、俺は
麻実子　飲まないの？
寅蔵　もうちょっとしてから
麻実子　あ、そう
純一　僕も
孝子　ええ？そうなんだ
純一　僕、飲んだら大変な事になりますから
金子　どうなるの？
純一　具合悪くなっちゃうんですよ
麻実子　つまんない。少しくらいいいじゃない
純一　いや、まあ
亀雄　俺、もらおうかな
孝子　うん、うん
麻実子　それじゃ、乾杯
金子　乾杯
孝子　乾杯
麻実子　フー
孝子　うめえ
麻実子　うめえなあ
金子　これ、長野のお酒だね
麻実子　そうなんだよね

寅蔵、携帯に出る

寅蔵　・・はい。おお、ハロー。うん。寅蔵くんだよ。うん、うん。
まだ、仕事。うん、まだ

寅蔵、下手へ

亀雄　フィリピンかあ
金子　さっきの話の人？
亀雄　多分なあ
純一　何ですか？
亀雄　あのさあ
金子　何でもない

純一　ああ・・あの、僕、作りましょうか、つまみ
孝子　ええ？
純一　大したもの作れませんけど
麻実子　いいよ、ここ座ってて
孝子　でも、私、少しお腹すいた
金子　私も
麻実子　ちょっと
金子　あのね、材料は買ってあるの
純一　ええ、さっき冷蔵庫のぞきましたから
金子　あ、そう・・じゃあ
孝子　お願いします
純一　はい。では
麻実子　いいのよ。別に
純一　いえ、いえ。
麻実子　でも、せっかく飲んでるのに
純一　僕、飲めませんから
麻実子　う～ん

純一、上手へ退場

麻実子　もう！何余計な事言ってんのよ、あんたたち
孝子　お姉ちゃん、行ってきなよ
麻実子　えっ
金子　手伝ってくれば
麻実子　ああ、そうか
孝子　ほら
麻実子　でも、あたし、何にも出来ないよ
孝子　まあ、そうだけど
麻実子　ホント、何にもしないからさあ
金子　いいから、行ってきなって
麻実子　ああ・・・でもなあ、こうやって酒飲んでるほうが、あたし楽しいかもなあ
金子　ちょっと
麻実子　だって
孝子　いいの？そんな事言ってて。今日、本気出すんじゃなかったの？
麻実子　うん。でもね、純一くん、あたしに興味ないみたいなんだよね
金子　だから、（亀雄を見て）あっ、ここ、禁煙だから
亀雄　えっ・・そうか
金子　だからこそでしょ。料理一緒に作ってさあ
麻実子　出来ないんだって、料理なんてしないもん
孝子　野菜くらい切れるでしょ
麻実子　包丁、嫌い
金子　何言ってんのよ
麻実子　お酒、好き
孝子　ダメだあ
金子　とにかく、行ってきな
麻実子　じゃ、これ飲んだら
孝子　・・・大丈夫？
麻実子　うん。飲まないとやってられないよ
金子　いってらっしゃい
麻実子　はい

麻実子、上手へ

金子　お姉ちゃん、飲みすぎなんじゃない
孝子　まあねえ・・あんたも飲みすぎ
金子　うん
亀雄　俺、飲んでいいか
孝子　どうぞ。おじちゃんは諦めなって
金子　うん
孝子　無理なんだから。どう考えたって
金子　そうかなあ
孝子　そうだって。辰雄くんいるんだよ。
金子　うん
孝子　あそこのおばあちゃん、うるさいし
金子　私、気に入られてるんだよ
孝子　そうだけど、一緒に暮らしたら違うって
金子　何よ。急にお姉ちゃん面して
孝子　あんたの事心配していってんでしょ。本気だしてるんだもん。びっくりした
金子　いいの別に
孝子　ほら、すぐ投げやりになる
金子　ほっといてよ
孝子　だって
金子　お姉ちゃんに言われたくない
孝子　・・・ごめん
金子　何？
孝子　ごめん
金子　やめてよ。思ってもないくせに
孝子　悪いと思ってるよ。だって
（麻実子　ちょっと、誰か来て・・孝子〜）
孝子　は〜い
金子　・・行って来な
孝子　うん。後で、ちゃんと話そ
金子　うん

孝子、上手へ

亀雄　・・・何か、あっただか
金子　別に
亀雄　そうか・・お前さあ、おじちゃんの事
金子　何でもないから・・本気じゃないもん
亀雄　・・・
金子　孝子、多分、亀雄くんの事好きだよ
亀雄　・・ああ
金子　亀雄くんはどうなの？
亀雄　あいつは、別に
金子　そう？
亀雄　俺は、俺はさあ、俺としてはさあ、俺にとっては、俺に関してはさあ、俺はさあ
金子　私のこと、好きなんでしょ
亀雄　・・・
金子　好きだよね・・ね
亀雄　・・・
金子　好きだったら、ちゃんと言ってよ
亀雄　言えね
金子　何で？
亀雄　言えね
金子　言ってよ

沈黙
亀雄の横へ移動

金子　亀雄くんの泊まってるホテル、私行こうかな、今夜
亀雄　いいよ
金子　行くよ
亀雄　それでいいだか
金子　私ね、今、世界に体が開いてるのね。ぱあって。だからいいの
亀雄　開いちゃいけねわ
金子　どうして？別に寂しいわけじゃないよ。だって、開いちゃったんだもん。世界に
亀雄　お前が寂しくなくても・・・俺は寂しいわ
金子　そんな事言わないでよ
亀雄　俺は、寂しい
金子　・・・好きって言ってよ
亀雄　・・・
金子　言ってよ、言って。好きなんでしょ
亀雄　言えね。好きだけど、好きって言えね
金子　何で？寂しいの？
亀雄　それだけじゃ、ねえ。言いたくても言えね

孝子、上手から登場

亀雄　あっ
孝子　ちょっと、あんたたち、何やってんのよ
金子　別に
孝子　金子、あんた
金子　はい、はい

金子、席を移動

孝子　あんたねえ、この期におよんで、何亀ちゃんにやる気だしてんのよ
金子　何？
孝子　いい加減にしなさいよ
金子　自分だって同じ事したじゃない
孝子　私は
金子　私ね、付き合ってる人いたんだ。でもね、半年前に、この人に取られたの
亀雄　えっ
金子　孝子にね、取られたの
孝子　ちょっと
金子　だって本当だもん
孝子　ここで言うことじゃないでしょ。後で話すって言ったでしょ
金子　いいじゃない
孝子　もう！何よ、あんたなんか、男に心開く前に、足開いてる女のくせに
金子　はあ？ばかじゃないの？やる気のない下半身してる女が
孝子　うるさい！そこが私のいいところなんだから
金子　そんな事言ってたらね、カビ生えるんだから。そこに
孝子　はあ？
金子　生えるのよ。男がよってこないカビが。カビ女！

孝子　もう、ありえない！許せない！

麻実子、上手より登場

麻実子　あんたたち、何やってんのよ
孝子　お姉ちゃん
麻実子　何？
金子　悔しかったらね、亀ちゃんに言いなさいよ
孝子　はあ？
金子　好きって言いなさいよ
孝子　違うもん。そんなんじゃないもん
金子　ばっかじゃないの
孝子　やめてよ
麻実子　何なの？いい年して。やめなさ～い
金子　うるさいから
孝子　亀ちゃんも亀ちゃんだよ。何金子に騙されてるの？
亀雄　いや
孝子　こいつはね、男にだらしのない女なの
金子　しょうがないでしょ。開いちゃったんだから
孝子　はあ？
金子　口が開いたの。こっちの口じゃないよ。ここの口が世界に開いちゃったの。そしたら世界がよく見えるようになって
麻実子　何言ってんの？
金子　私の口はね、いつもパクパク喋ってんの。男と話すんだったら、ここの口で話しなさいって。こっちの口で話しても分かんないんだから。どんなに頑張ったって、男には分かんないんだから
孝子　何でそんな事言うのよ。結局、あんたが辛いだけじゃない
金子　うん。辛い。でもしょうがないんだもん
麻実子　ああ！
亀雄　何？
麻実子　忘れてた。あんたたち、喧嘩してる場合じゃないよ
孝子　ん？
麻実子　純一くんが大変なの。さっき日本酒少し飲ませたらさあ

麻実子、上手へ

麻実子　ああ！どうしよう
金子　えっ
麻実子　来た。大丈夫？

純一、酔っ払って、ふらふらで登場

純一　大丈夫ですよ
麻実子　あの、あの
純一　あれ～皆さん、深刻な雰囲気、あははは
金子　ちょっとお姉ちゃん
麻実子　ああ～
孝子　何で飲ませたのよ
麻実子　だって、ちょっと飲むんだと思ったらさあ、ぐいって。ああ、ああ。平気？
純一　ええ

純一、麻実子を抱きしめる

純一　わあ
麻実子　ちょ、ちょ
孝子　お姉ちゃん！
麻実子　だめ、だめ、こんなの久し振りだから・・なされるがままに
金子　お姉ちゃん
純一　あれ？胸がない・・あれ？ぺちゃんこだあ
麻実子　ちょっと、あたしにだってあるわよ
純一　あれ～ああ！

純一、孝子に近づく

純一　元気？久し振りだね、ベッキー
亀雄　ベッキー？
孝子　あのさあ
純一　今日さあ、ちゃんと別料金払うからさあ
麻実子　どこの店だよ
純一　いいかな？いいかな？

純一、孝子の胸を触る

純一　ああ・・れ？やわ、硬い
孝子　まあね
純一　ベッキー痩せたの？こんなんだったけ？
麻実子　ちょっと、孝子！
孝子　大丈夫、私、不感症だから
金子　あっ
亀雄　純一、いい加減にしろよ
孝子　亀ちゃん
亀雄　孝子、大丈夫か？
孝子　亀ちゃ～ん
亀雄　おい、純一
純一　やめてください、やめてください。痛い！
亀雄　ちょっと横になれ
純一　やです
亀雄　痛い、痛い
純一　このやろう
亀雄　やめろ、やめろ
孝子　ちょっと、あんた、亀ちゃんに何やってんのよ
純一　あっ、ベッキー
麻実子　金子
金子　へ？
麻実子　押さえて
金子　うん
麻実子　孝子
孝子　はい

寅蔵、下手より、登場

麻実子　いい加減にしなさいよ。もう！あんたね、ここで考えるからダメなのよ。こんなもん。こんなもん。えい！

麻実子、純一の股間を蹴る

純一　あっ
金子　とりゃ～

純一、ソファに死んだように倒れこむ

麻実子　ふ〜
亀雄　純一、大丈夫か？
純一　・・・
亀雄　おい、おい
寅蔵　どうしただ
亀雄　ちょっと、酒飲んで暴れたもんで
寅蔵　そんな。ひでえなあ
金子　ばかじゃないの
孝子　ホント
麻実子　くっそ〜。こんなやつだなんて
孝子　お姉ちゃん、純一、諦めな
麻実子　おう、やめる。信じられないよ
寅蔵　お前達、これじゃあ、純一、可哀想じゃねえか
金子　いいの
孝子　ねえ、つまみは
麻実子　作ってない
金子　もう
孝子　お腹すいた
金子　でもさ、お姉ちゃん凄かったね
麻実子　ん？
金子　キック
麻実子　ああ
孝子　そうだよね。何か慣れてた
麻実子　私ね、別れた男の股間、全部蹴り倒してるから
孝子　すげえ
金子　わあ
麻実子　そのくらいしないと、気がおさまらないの
孝子　そうだね、そうだね
麻実子　ま、弱点だしね
金子　うん
麻実子　ね、どうしたの？二人とも
亀雄　うん
麻実子　こっちきたら
寅蔵　いや、ここで
麻実子　あ、そう
金子　あれさあ、何で痛いんだろうねえ
孝子　ああ
麻実子　ふにゃふにゃしてるからじゃない
金子　ええ？しっかりしてるときもあるのに
麻実子　それ、たまにでしょ
孝子　ああ、そっか
金子　でもさ、大変だよね。あんなのついてたらさ
孝子　そうだね
金子　大変だね
亀雄　えっ、ああ、うん
金子　ねえ
寅蔵　うん、うん
金子　私、考えられないよ。だって、体の外についているんでしょ
孝子　うん
金子　しかも、痛いんでしょ、ちょっと蹴られただけでも
亀雄　うん
金子　やだあ

麻実子　ある意味、可哀想だね
孝子　まあね
麻実子　弱点ぶら下げて歩いてるんだから
金子　私たちはね、中に入ってるから、楽なのかもね
孝子　でも、あんた、喋るんでしょ
金子　うん。会話してる
麻実子　そんな事あるわけないでしょ
金子　だって本当だもん
孝子　何喋んのよ
金子　・・元気ですか？
孝子　はあ？
麻実子　そんな、自分の体なんだから、聞かなくても分かるでしょ。しかも何で敬語なのよ
金子　だってそうゆう関係だから。あとね、あとね、今日はこの下着でいいですか？とか
孝子　くだらねえ。それで何て言うの？
金子　今日は黒でって言う時がある。結構、うるさいのよ。まあ、気使ってくれてるんだけど
麻実子　ああ
金子　あとね、お腹すいたって言うのね、彼女が
孝子　彼女？
金子　一応、女でしょ
麻実子　あっ、そうか
金子　彼女がね、お腹すいたら。じゃ、この男でいいですかって
麻実子　聞くんだ
金子　当たり前でしょ。食すのは、彼女なんだから
孝子　ああ
金子　お姉ちゃんたちも、聞いてみな。話してみな
麻実子　やだあ・・ちょっと、孝子
孝子　ん？
麻実子　あんた、何本気にしてるのよ
孝子　元気ですか～
麻実子　それ、猪木だから
孝子　元気ですか～
金子　はい
孝子　ああ
麻実子　金子
孝子　お腹すいてますか～
金子　はい。とっても
孝子　分かりました
金子　亀雄くんが食べたいです
孝子　了解・・亀ちゃん

孝子、立ち上がる

亀雄　は？
孝子　ちょっと
麻実子　孝子、どうしたの？
孝子　亀ちゃん、あっち行こう
亀雄　ええ？
孝子　いいから
麻実子　ちょっと
孝子　いいの。気にしないで。こんな機会がないと私、私
亀雄　やめろって
孝子　やさしくするから

亀雄　やだ～
孝子　痛くないから
亀雄　うお～

孝子、亀雄、座敷に入る

麻実子　いや～。おじちゃん
寅蔵　眠い
麻実子　はあ？金子
金子　いいの、いいの
麻実子　ええ？
（孝子　亀ちゃん）
（亀雄　いやだ、いやだ）
（孝子　大丈夫だから）
（亀雄　ああ！）
（孝子　わあ）
（亀雄　そこは、そこは。ああ、ああ）
（孝子　えい！このやろ、これか、これなのか）
（亀雄　触るな！犯されるううう。やめろおおおお・・・
　あっ）
金子　お姉ちゃん
麻実子　ん？
金子　静かになった
麻実子　はあ

亀雄、孝子、座敷から出る

金子　短いな
麻実子　うん
孝子　亀ちゃん
亀雄　・・・
孝子　どうだった？
亀雄　・・・
孝子　よかった？
亀雄　・・・
孝子　そう。私もよかった
亀雄　うん
孝子　ね
亀雄　ん？
孝子　ね

孝子、唇をつきだす

亀雄　おお

亀雄、孝子にキスをする

孝子　あは
亀雄　あのさ
孝子　何？
亀雄　眠い
孝子　えっ
亀雄　何か、眠い

暗転

・4場・

男は全員下手のソファに寝ている
孝子、金子もぐったりしている

孝子　何か、疲れたね
金子　うん。よく寝てる
孝子　ねえ
金子　起こして、二階連れて行こうか。布団もあるし
孝子　う～ん。面倒くさい
金子　ああ
孝子　いいよ。このまんまで
金子　んんん・・なんて飲み会だったんだろう
孝子　フ～
金子　明日、仕事？
孝子　あんたもでしょ
金子　うん
孝子　休んじゃおうかな
金子　私も
孝子　・・・お茶、まだかな
金子　私、お姉ちゃんが一番心配なんだけど
孝子　そう、そう、飲みすぎだよね
金子　もともと、あんなに飲む人だっけ
孝子　最近ね、量が増えたみたいだよ
金子　へえ・・ちょっと、ここ、片付けよ
孝子　ええ？
金子　やろうよ

金子、テーブルの上を片付け出す

孝子　私も、眠いなあ
金子　これやってから・・ちょっと
孝子　眠い
金子　寝たら死ぬよ
孝子　マジで？
金子　冬山だから、ここ
孝子　いつからだよ
金子　・・・・ねえ
孝子　ん？
金子　あのさ、孝子さあ、佐藤くんと何かあった？
孝子　・・・
金子　何かあったんでしょ
孝子　・・・ちょっと、無理かも
金子　ふ～ん
孝子　何で？連絡行った？
金子　うん・・・この前、家にきた
孝子　そう
金子　泊まってった
孝子　へえ
金子　何日か、いたんだけどさ。二日目くらいかな。仕事終って家に帰ったらね、佐藤くん・・・鶴折ってた
孝子　は？
金子　折り紙してた
孝子　ああ
金子　もう、すごい数の鶴で

孝子　うん
金子　佐藤くん、あんまり器用じゃないからね、下手なの。不恰好な鶴ばっかで、どっちが頭なのか分からないの
孝子　うん
金子　じっとみてたら気味が悪くなって。私、捨てちゃった
孝子　そう
金子　捨てても怒らなくてさ、それが余計恐かった。捨てても、捨てても、ずっと鶴折ってて。何にも話せなくて。だから、作ったら、私がくしゃって潰して、また作ったら潰して。その繰り返し
孝子　・・・ダメなんだ。もう、本当に
金子　うん
孝子　・・・ごめん
金子　私に謝ることじゃないでしょ
孝子　そうだけど
金子　謝るんだったら、もっと早く謝って欲しかったよ
孝子　・・そうだね・・何でこんなに眠いんだろう
金子　・・・
孝子　眠い
金子　私も

麻実子、麦茶を持って上手より登場

麻実子　あれ？寝た？
金子　起きてる
麻実子　眠いの？
孝子　眠い
麻実子　そう。これ、飲みな
孝子　うん
麻実子　もうちょっと、起きてようよ
金子　うん
麻実子　もうちょっと、話そうよ
孝子　うん
麻実子　久し振りに会ったんだしさ
孝子　お姉ちゃん、飲んじゃだめ
麻実子　ええ？
孝子　飲みすぎ
麻実子　は～い・・何、二人とも眠いの？
金子　うん
麻実子　やだ。寝ないで、寝ないで
孝子　う～ん
麻実子　今日、ここに泊まって行こうよ
金子　そうだね
麻実子　明日、始発で帰ればいいでしょ
孝子　この人たちは？
麻実子　いいよ、このまんまで
金子　ちょっと、可哀想だな
麻実子　だって、布団、三組しかないよ
金子　そうだけど
孝子　お姉ちゃん、眠くないの？
麻実子　うん。まあ、少し
金子　意外に、元気だね
麻実子　うん。あっ、でもあんたは帰んないとダメか
金子　えっ
麻実子　鳥、鳥飼ってんでしょ
孝子　そっかあ

金子　大丈夫だよ。大丈夫って言うか、死んだんだ
麻実子　えっ
金子　急にね、バタって
麻実子　そう。いつ？
金子　三日前
麻実子　うん・・ちょっと、孝子
孝子　ん？
麻実子　寝ないで
孝子　うん・・痛い
麻実子　我慢して
孝子　なんで～・・・ねえ、お姉ちゃん
麻実子　ん？
孝子　もしかしてさ、やったの？
麻実子　何？・・・うん
孝子　そう、入れたんだ
麻実子　うん
孝子　何に入れたの？
麻実子　最初のビール
孝子　ええ？でも、私たちのほうが、この人たちより飲んだのに
麻実子　そうなんだよね。変なの
金子　何の話？
孝子　えっ、言ってないの？金子に
金子　何？
麻実子　言ってない。
孝子　何で？
麻実子　言えなかった
孝子　やだ
金子　どうしたの？
孝子　お姉ちゃん、言ってよ
麻実子　うん
孝子　金子には、ちゃんと説明しないと
麻実子　そうだね
金子　ええ？
麻実子　・・・・あのさ・・・
金子　いや・・何？何か恐い事？
麻実子　そんな事ない
金子　あ、そう
麻実子　・・・
孝子　お姉ちゃん
麻実子　うん・・・・あのね・・・薬入れたんだ
金子　は？
麻実子　ビールにね、薬入れたの
金子　えっ？
麻実子　眠くなる薬を、私、入れました。ビールに。だから、この人たちが寝てるのも、今、私たちが眠いのも
金子　何で？
麻実子　理由は、あんまないんだけど
金子　ちょっと、分かんない。はあ？何やってんの？
麻実子　ごめん
金子　いや、謝られてもさあ・・・孝子は知ってたの？
孝子　うん
金子　どうゆう事？
麻実子　はあ
金子　ちょっと
麻実子　大丈夫、そんなに入れてないから。ちょっと眠く

なる分しか
金子　でも・・本当に？
麻実子　うん
金子　なんでこんな事するのよ
麻実子　ごめん
金子　ひどいじゃない。おじちゃん達、かわいそうじゃない
孝子　そうだね
金子　あんたも、あんたよ。何で、知ってて止めなかったの？
孝子　だって、お姉ちゃんが・・
金子　お姉ちゃんが、何？
麻実子　孝子は悪くないから
金子　私、死ぬの？
麻実子　本当に、ちょっとだから、ねえ
孝子　うん
金子　あのさ・・・死にたいんだったらさ、一人で死になさいよ
麻実子　・・・
孝子　あんた、何でそんな事言うのよ
金子　私たちを、巻き込まないで
麻実子　別に、そうゆうつもりじゃ
金子　孝子、巻き込んでるでしょ
麻実子　それは
孝子　あのね、私は、納得の上で
金子　何？お姉ちゃんと一緒に死ぬつもり？
孝子　・・・一緒に寝ようって思っただけ
金子　大丈夫？・・・眠い・・どうしてこんな事
麻実子　寝よ
金子　はあ？
麻実子　眠いんだったら、寝ようよ。私もすぐ、寝るから
金子　いや。私は、今、寝たくないんだもん
孝子　お姉ちゃん、寝よ
麻実子　うん

沈黙

麻実子　もうちょっと、話そうよ
孝子　いいよ。でも、途中で寝ちゃうかも
麻実子　うん。金子
金子　はい
麻実子　ごめんね。私ね、よく分からないんだ
金子　何が
麻実子　何で、こんなに私、辛いのか
金子　うん
麻実子　もやもやしてて、いつもぼんやりしてて、ちゃんと考えられないの。一人で寝ることに耐えられなくて
孝子　お姉ちゃん、私も一緒だから
麻実子　うん
金子　もう、やめて。何よ、二人して。何でいつも二人で決めちゃうの？私なんでいつも仲間外れなの？昔っからそうじゃん。私のほうがずっと一人だったよ
麻実子　そんな事、ないよ。私はね、子供のときからずっと一緒だったあんたたちと、おじちゃん達と、眠りたかったんだ。それだけ。
金子　勝手だよ
麻実子　そうだね
金子　私だって、今、一人で家にいて、男が出来たって、

やっぱり一人で・・お姉ちゃんには、孝子がいるじゃない。孝子にはお姉ちゃんがいるじゃない。私なんて、鳥も死んじゃったし

孝子　何で死んじゃったの？

金子　分かんない。買い物に出かけて、帰ったら死んでた

麻実子　埋めた？

金子　うん。傘の先で穴掘って、深く深く、細く、細く掘って、で埋めた。石ころだらけの土の中にこんな小さな遺体。くちばしが白くなってて、あんなに赤くてきれいなくちばしだったのに、真っ白くなってて

麻実子　そう

金子　あたし、穴ほってたら、なんかさ、もし私が、こうなったら、私が遺体になったら、誰がこの穴掘るんだろうって思った。一人で暮らしててさ、誰にも知られないで、死んでいくんだから。そしたら、誰が私のこと土に埋めてくれるの？誰が穴掘ってくれる？・・お母さんやお父さんには頼めないよ・・申し訳なくて

孝子　私が掘るよ。私が金子の穴掘ってあげる。おっきな穴掘るよ。穴の中で腕伸ばせて、ぐうって、出来るように大きな大きな、穴

金子　じゃあ、あんたが死んだらどうすんの？

麻実子　私が掘るよ。

孝子　お姉ちゃんは？お姉ちゃんの穴は？

麻実子　私は・・いいよ

孝子　なんで？

麻実子　私は、自分で掘る。死ぬ前に自分で掘って用意しとく。で、その中に一人で入っていく

孝子　そんなこと、言わないでよ。お姉ちゃんの穴も私が掘るよ

金子　わけ分からない事言わないでよ。どうにもならないでしょ

孝子　だって。私が、二人分掘る！多分そうなんだよ。きっと、そうゆう順番だから

金子　なにそれ

孝子　私が、きっと、最後だから。ちゃんと、見送ってあげるから。ちゃんと、さよならするから。二人がいなくなったって、私は大丈夫だもん。きっと、大丈夫な人が最後に残るんだよ。だから、私がおっきな穴掘る。傘の先で、時間かけて、大きな大きな穴。石があったら、よけてあげるから。痛くないように、よけるから。だから、自分で掘るなんて言わないで

麻実子　うん

孝子　そんな事、絶対、止めて

麻実子　ありがと

金子　嘘つき

孝子　ええ？

金子　孝子には無理だよ。つよがんないでよ

孝子　何が

金子　あんたには出来ない。あんたは、お姉ちゃんが死ぬの耐えられないよ。

孝子　出来る

金子　私が死んでも何とも思わないだろうけど

孝子　そんな事ない。私は、金子が死んだら、きっと思うんだもん。優しくしてあげられなくて、あんたの事、分かってあげられなくて、一人にさせちゃって、ごめんねって・・・それで、冷たくなった、金子に私、言うんだ。もうちょっと、あ

んたのお姉ちゃんやってたかったよって、私の妹でいて欲しかったよって。また、どっかで会おうねって。また、姉妹になろうねって

麻実子　やめて。そうゆうの、やめて

孝子　お姉ちゃん

麻実子　私、そうゆうのが嫌なの。だから、だから薬入れたんだから。誰かが後とか、先とか、そうゆうのが、私は、私は絶対嫌なの。一緒に寝ようよ。今、ここで、一緒に寝ようよ

孝子　お姉ちゃん

金子　この人たち、朝になったら、ちゃんと起きる？

孝子　多分、大丈夫だよね。ね、お姉ちゃん

麻実子　うん・・・金子、寝ようよ

金子　やだ。私は寝ないよ

孝子　どうして？

金子　だめだって。こんなんで、寝たらダメ。お姉ちゃん達も、寝ちゃだめ

麻実子　いいの。私は

金子　ダメ

金子、男達が寝ているところに近づき

金子　起きて、起きて

麻実子　無理だって

金子　起きて。ほら、ほら

麻実子　起きないよ

金子　ダメ、寝ちゃダメ。おじちゃん、純一くん・・起きてよ

孝子　やめな。金子

金子　起きてよ。孝子？孝子

孝子　う～ん

金子　寝ないで、お姉ちゃん

麻実子　・・・

金子　お姉ちゃん

麻実子　んんん

金子　寝ないで。起きてて。ずるいよ。私、一人になっちゃう。ひとりになっちゃうよ。孝子？一人にしないでよ

孝子　うん

金子　ずっと、一緒だったじゃない。子供のときから一緒だったじゃない。私が眠れない時、お姉ちゃんたち、傍にきてくれて、手握ってくれたじゃない。右手がお姉ちゃんで、左手が孝子で。お姉ちゃんたちの手、私よりも大きくて。お姉ちゃんは凄く強く握ってくれて、孝子は優しく握ってくれて、それが、私は嬉しかったんだから。いつも、私が寝るまで起きててくれたのに。寝てる振りして、起きててくれたのに。待ってよ。いかないでよ。お姉ちゃん、お姉ちゃん

少し、沈黙

金子　先に寝ないでよう。

麻実子　うん、うん

金子　喋ろう。寝ないで喋ろう

孝子　うん

金子　目、開けて。お姉ちゃんたちの小さな目、開けてよう。私、ずっと寂しかったんだよ。私だけ、目が大

きくて。お姉ちゃんたちは小さくて。私だけ違って

麻実子　私は羨ましかったよ

孝子　私も

金子　羨ましかったのは、私のほうだよ。お姉ちゃんたちは、小さい目で、私のこと優しく見てくれた。目が大きい私よりも、世界の事よくみてたじゃない・・何か、くらくらする

孝子　お姉ちゃん

麻実子　ん？

孝子　薬飲むと、こんなんなるの？回ってる

麻実子　うん

金子　喋ろう。私は喋る。寝ちゃダメだよ

孝子　うん。何話せばいいの？

金子　なんでもいいから。お姉ちゃんも

麻実子　うん

金子　こんな事で寝てたまるか。私は絶対寝ないんだからでも、お姉ちゃん達のそばにいるから。私は寝ないけど、そばにいるから。どんなに嫌がられたって、私は傍にいるんだから。眠いけど寝ないんだから。このまま、ずっと、まわるんだから、私は。子供のときから、ずっと、お姉ちゃん達のこと、追いかけていたんだから。どんなに追いかけたって、お姉ちゃん達は振り向いてくれなかったけど、私は追いかけ続けるから

麻実子　分からないでしょ。あんたには。どんなに、私が言ったって、言ったって、死んじゃだめとかくだらない事言うでしょ。そんな事言われたって、私にはひびかないよ。だって、死にたいんだもん。決めるの私だもん。家に何本もある、コードで、テレビとかさあ、扇風機とかさあ、それつないでるコードで死ぬの私だもん。薬沢山のんでさあ、コード使うの私だもん。自分で穴掘るんだもん。私は。

孝子　お姉ちゃん、私、お姉ちゃんと死なないよ。私、金子と一緒にお姉ちゃん見送ってあげる。ちゃんとお姉ちゃんが逝くの見ててあげる。寂しいけど見ててあげる。お姉ちゃん、金子

金子、テーブルの上に乗る

金子　私は、寝ないよ。起きててやる。ずっと起き続けてやる。私は、私は

暗転

おしまい